

## 随 想



## 新年を迎えての回顧と展望

的 場 幸 雄\*

新年を迎えて会員諸兄のご健祥をお祝いいたします。

昨年4月、私が会長に就任いたしましてからすでに9カ月を経過しました。その間皆様のご指導ご協力によりまして、会としての活動を継承して頂くことができましたことを心から感謝しております。

顧みますと、昨年は各方面において種々な期待を寄せられておりましたところのいわゆる70年代の第1年に当たるのでありました。当会といたしましても兼ねてより種々な計画が持たれていたわけですが、その一部が実施、実現に移されました。

なかんずく、特記すべきことは、9月東京において開催せられました鉄鋼科学技術国際会議(ICSTIS)であります。これは前々会長佐野教授のご任期の後半において具体的な準備を始めたもので故湯川正夫氏を組織委員長として、その開催の大綱が定められました。そして藤本前会長の時代を通じて、財政的措置、細目にわたる実行方針が決定せられました。その間不幸にして、湯川組織委員長が、会議の開催に先立ち一昨年10月ご他界になりましたことは痛恨に堪えないことであります。その後を私が引き継いだのでありますが、すべては、湯川、藤本ラインに沿って運ばれ、昨年9月の開催に至つたのであります。

会議は、教育を含めて7部門にわたり、まれにみる広範なものでありましたため、初めは内外に、このような広範囲の会議が、果たして満足に運営しうるものかどうか、また果たして所期の成果を収めることができるかどうか、などにつきまして若干の批判もあり、また危惧の念を持たれたのはむしろ当然であつたかもしれません。しかしいよいよ開催となりますと、各国および国内の学界ならびに業界から積極的なご支援、ご参加を得ることができまして、参加国は、世界の主要製鉄国を網羅し、開発途上国など35カ国におよび、提出論文は300余篇、部門別にもほぼ均衡が得られ、参加登録人員は1100余名におよぶ盛況でありました。ちなみに、第5部門「薄板の成型および成型性」は、国際深絞り性研究グループ(IDDRG)との共催の形を採つたものでありまして、IDDRGに対してそのよきご協力を深く感謝する次第であります。

会議は9月7日から11日におよびましたが、その準備につきましては、組織委員会の下部機構として、実行委員会(橋口隆吉委員長)、財務委員会(吉崎鴻造委員長)、総務委員会(田畑新太郎委員長)、プログラム委員会(橋口隆吉委員長)、技術委員会(荒木透委員長)、設営委員会(氏家信久委員長)らが置かれ、それぞれ委員長の適切なご指導により、各委員の献身的なご協力が得られ、すべては円滑にかつ十分に進められました。開会が迫るとともに、とくに裏方役としての設営委員会ならびに協会事務局諸君の活動は特記すべきものであります。また、同時に通訳を担当された諸嬢の事前勉強とそれを指導された委員諸君のご苦勞も特筆すべきであり、会議当日においての言葉の障壁は著しく緩和せられたのであります。これらの委員その他の方がたに心からなる敬意を表する次第であります。

海外よりの参加者は一様に、論文の質の高さ、整然としてそつのない運営を讃嘆し、この会議の意義を認識した模様で、会議半途にして早くも、この会議を東京会議をもつて終わらせることなく、次回を4年後に開催することがまずドイツ代表より申出され、続いてアメリカ代表からも同様な申出がありま

\* 日本鉄鋼協会会長 東北大学名誉教授 新日本製鉄(株)常任顧問 工博

した。主催者として十分な役割を果たしたことを会員の皆様とともに喜びたいと存じます。ただ論文の重要さにふさわしい十分な討議の時間がなかつたことを遺憾とする声があり、また近着の外国専門誌などにも同様な記載もあり、これはわれわれとしても感じたことであり、今後十分に考慮すべきものと存じます。

その他本会の国際的行事としては、国際標準化機構 (ISO) 鉄鋼材料委員会 (TC 17) の 2 つの下部委員会である SC 4 (熱延鋼板) および SC 17 (特殊鋼) が 10 月あいついで東京で開催され、各国より多数の参加者があり、それぞれの成果を収め得たことを皆様にご報告申し上げたいと存じます。

また、その間多くの外国の小団体あるいは個人が当協会を通じて、わが国の鉄鋼関係諸方面への接触紹介を求めてきたことも、当協会の国際的活動の一面を物語るものでありましょう。

さらにまた、わが国からは、8 月ヴェネズエラで催されたラテンアメリカ鉄鋼協会 (ILAFA) の総会に今井光雄理事が代表参加されて講演をされ、5 月の英国鉄鋼協会年会に当たつては、恒例の各国鉄鋼協会事務局担当の会に田畑専務理事が出席せられ、同じく 5 月の米国鉄鋼協会 (AISI) と 11 月のドイツ鉄鋼協会 (VDEh) の年次大会には、それぞれ私あるいは田畑専務理事と私とが出席、おのおの相互の友好関係を深め、あるいは今後の国際間交流などについて話し合うところがありました。

このように、昨年は 2 つの大きな国際会議を主催するなど、国際的活動が例になく活発でありましたが、一方国内的活動も、また例年に劣らないものがありました。

恒例の春秋の総会および講演大会も盛況であり、提出論文の質もすぐれたものが多く、また討論会形式の採用も好評を得ております。また各支部において催される講演会や西山記念講座などもますます有益なものとなりつつあります。これらは会員諸賢の日頃のご研鑽の賜物で慶賀に堪えないところであり本年もまたいつそうの発展を期待せられるところであります。

わが国の鉄鋼生産は過去 10 年間に、量的に数倍の伸張を記録いたしました。今後はそのような急速な量的伸張はおそらくは望みえないのではないのでしょうか。今後は、量の問題とともに質の問題がいつそう重要さを加えてくることは明らかであります。よりよき品質のものを、新たなる品質のものを、経済的に生産していけるか否かが大きな問題であります。また、エネルギー問題から従来法によらない製鉄法の開発も現実の問題として取り上ぐべき時機でありましょう。環境保全の問題は生産技術上必須のものとなつてまいりました。当協会といたしましても、当然これらに対応するところがなければなりません。その意味で、共同研究会、標準化委員会、鉄鋼基礎共同研究会、資料委員会など合計 14 の委員会組織を持つて、それぞれの分野において活動を継続いたしている次第でありまして、それらの活動につきましても、「事業の概要」として、秋期講演大会の際お手許にすでにお届けいたしてありますのでご覧いただきたいと存じます。

とくに共同研究会の原子力部会は、藤木新日鉄副社長を部会長とし、7 小委員会を擁して、調査段階を終り具体的研究活動へ進みつつあるものでありまして、その帰趨は製鉄法の未来を運命づけるものとして多大の期待を寄せられており、われわれとしては関連技術および諸材料の進歩を考慮しつつ、息長くしかも精力的に研究を進めるべき研究課題の最重要テーマと考えるものであります。つぎに、標準化委員会の仕事は、国際的関連を持ち、技術的にまた経済的に影響するところが大きく、今後いつそう力を用うべきものと考えております。また、環境保全の一環として、まず排煙の脱硫の問題は、日本鉄鋼連盟の委託もあり、今日の問題として急速な解決が迫られているものであります。

さらにまた、情報処理の問題も今後ますます重要となることは申すまでもありません。

思いつくままに今後力を入れてゆくべき問題の二、三について申し述べましたが、その他の各委員会の仕事もできうる限りの積極性をもつて進め、大方の要望にそいたいと念願しております。

会員諸賢におかれましても、今後ともいつそうのご協力をいただきたく、また私共の気付かない点など遠慮なくご指摘いただきまして、当協会設立の趣旨に向かつて進みたいものと願っております。